

67 資本主義と自由 M・フリードマン

Capitalism and Freedom, 1962, Milton Friedman

政治的にも経済的にも、今世紀でもっとも影響の強かった自由主義者は、間違いなくフリードマンであろう。彼以上に、自由主義についての深い洞察を行った研究者はいくらでもいるだろうし、その中にはフリードマンの自由主義の不徹底さを批判するものも多い。しかし、一九七〇年代後半から八〇年代にかけて先進国で盛り上がった新自由主義の流れは、多くをフリードマンに負っていることは紛れもない。

ここで取り上げた『資本主義と自由』は、決して自由主義の全盛期に書かれたものではない。この元となったウォバッシュ大学での講義が行われた一九五九年は、ケインズの福祉国家の全盛期である。冷戦体制下で国家主義に対する警戒感があったとはいえ、この時期に、ケインズの政策の一つ一つ反論していくことは、必ずしも容易なことであったとは思われない。

フリードマンの国家による経済への干渉主義批判は次の四つに類型化できると思われる。金融財政政策に対する批判、国家管理の効率性批判、国家管理のシステム的問題点、現代民主主義の制度的欠陥である。第四の点は、

後にブキャナン¹¹ワグナーの定理として知られることになったものと同じである。民主主義的意思決定過程では、多数派の好まない政策は、それが妥当なものであつたとしても決して採択されることはない、ということを一九五〇年代にすでに指摘していたことは特筆に値するであろう。

金融政策についての批判や財政政策の批判は、ケインジアン¹²ミナタリスト論争の争点でもあつた。これについて詳しく取り上げる余地はここではないが、フリードマンは、政府の裁量的政策によって貨幣供給量を変化させることは決して経済の安定にはつながらず、むしろ不確実性を増大させ不安定化させることを指摘した。また、ケインジアンがもっとも問題としている非自発的失業の解決という点に関しても、大恐慌時における政府の誤つた貨幣供給政策が不況を長期化させたとして批判していた。この論争に関しては、第三者の目から見るといまだ決着がついているとは言いがたい。

国家管理の効率性の問題は、その議論の多くをハイエックの知識論に負っている。ハイエックは一九五〇年からシ



フリードマンの自由主義
フリードマンの議論を読むと最初に気がつくのは、それが自由擁護論ではなく、国家干渉批判であることだ。彼は、自由の意味を考えたハイエックとは違い、国家の経済に対する現行の介入政策の欠陥と限界を指摘することで、背理的に自由主義を擁護したのである。しかし、現行の政策批判¹¹自由擁護にはならないことは明らかである。なぜなら、制度的問題があるとしても、制度改良によってそれは回避可能であるという主張を否定しえないからである。実際フリードマンの議論が、ラディカルな自由主義者たちのように完全な国家否

カゴ大学道徳科学教授であり、一九四六年からシカゴ大学の准教授（一九四八年からは教授）になっていたフリードマンとの思想的関係は無視しえない。経済における様々な資源の配分を決定するためには、社会に散在する無数の知識を集めなければならぬ。だが、政府が市場よりそれをうまくやれる保証はどこにもないし、多くの場合、人の力は「見えざる神の手」に劣ることになる。

福祉国家においては、各政策は基本的には弱者を保護し、経済的環境を整え、すべての国民の経済状態を改善させることを目的として設定される。しかし、その多くは時間の流れの中で当初の目的からはずれ、政策によって作られた制度をうまく利用できる一部の人々の利益を守るため機能するようになってしまふ、というシステムの問題点は今日ではしばしば指摘されている。フリードマンが特に取り上げた、医師の免許制もそもそもは不当な治療から患者側を保護するために作られた制度であった。しかし、実際にはそれは医療業界への自由な参入を阻止し、アメリカ医師会を強力な圧力団体と化し、医療費の高騰を通じて貧困者の生活を脅かしていることとなる。彼は、医療の質を維持するためには免許制の必要はなく、登録制によって医師の所在を明らかにし、その上で競争するだけで十分であると主張した。こういった解決策の提案は、医療情報の難解さに対して後込み（しりぞ）てしまふわけに比べて容易には認めがたいものがある。

だが、医療はともかくとしてもわれわれの身の回りには、「弱者保護」の名の下に、政府に後押しされた不適切な独占が堂々とまかり通っていることは事実であろう。

フリードマンが他の多くの自由主義者（例えばモンペルラン・ソサイエティのメンバーたち）の批判にもかかわらず、彼ら以上の影響力を持ち得たのはなぜだろうか。それは、彼の議論がわかりやすく、提起している問題点とその時代の人々の感じていた不快感を正確に表していたからに他ならない。この簡潔さ、明瞭さは時には浅薄さを指摘されることもあるが、少なくとも政治家が自らの態度を明確に表現する場合には非常に重要なポイントとなる。政治の現場ではわかりやすさが、そのまま説得力になるからである。

フリードマンは、学者や政治家といった直接経済政策にかかわる人々だけでなく、一般の人々にまで、自由主義経済の重要性と優越性を説いた。彼は、自由な社会が一部の「賢人」によってもたらされるのではなく、すべての人々の自発的な努力によってのみ維持されることを誰よりも理解していたのである。

（江頭進）

翻訳 ●熊谷尚夫・西山千明・白井孝昌訳「資本主義と自由」（マクグロウヒル好学校社、一九七五年）／参考文献 ●エイモン・パトラー著、宮川重義訳「フリードマンの経済学と思想」（多賀出版、一九八九年）

定につながらず、代替案の提出にとどまっているのはこの辺りと関係するように思われる。ただし、このことは直接に彼の議論を否定することにはつながらない。むしろ完全な自由体制への移行過程を考えず「絵に描いた餅」を拝んでいるような人々よりは、遙かに説得的である。経済理論においてもその実用性を強調したフリードマンは、ここでもまた経済政策の現場を担った人物としての特徴を見せているのである。

モンペルラン・ソサイエティ
K・ポパーやF・ハイエクによって、一九四七年にスイスのモンペルランで設立された。

二度の大戦の中で失われてしまった自由社会の知的基礎を復活させるために戦争当事国の知識人が結集することを目的としている。